

乳児期の発達のチェックリストにみるアタッチメント行動

小野島 萌 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
大塚 己恭 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
青木 紀久代 お茶の水女子大学

要約

本論は、乳児期の発達チェックリストからアタッチメント行動の発達指標となるものを探索したものである。乳児の行動観察から発達全般をアセスメントできる主な発達チェックリスト（京都国際社会福祉センター，2001；遠城寺，2009；三宅，1989；津守・稲毛，1995）を選び、その項目にあるアタッチメント行動を抽出、整理した。その結果、0 から 3 ヶ月までの間に項目が最も多く抽出され、それらの項目は社会性や言語の発達領域に属していた。この結果より、発達検査の社会性、言語の発達領域の項目に注目することでアタッチメントも考慮しうることが示唆された。

キー・ワード：アタッチメント、発達検査、乳児院、アセスメント

I. はじめに

社会的養護の中でも、乳児院に入所する子どもの7割以上は1歳未満児であり、約8割は2年以内に退所していく（厚生労働省，2017）。入所の主な理由は、虐待、親の精神疾患、親の放任怠惰などの不適切な養育環境が上位を占めている（厚生労働省，2017）。これらを理由として入所した子どもは心身に深刻な影響を受けており、入所後もさまざまな症状や問題を示す（増沢・青木，2012）。特に被虐待児は、症状や問題が深刻であり治療的援助が求められる。このような現場からの声や虐待問題の深刻化を背景に、2000年の児童虐待防止法の施行以降、乳児院にも心理職が配置されるよう整備されていった。

乳児院における心理職の役割として、心理的ケアはもちろん、コンサルテーション、家族支援、

発達状態の把握が挙げられている（全国乳児福祉協議会，2014）。なかでも発達状態の把握は、一次保護時、入所中、退所前のどの時点でも必要とされている役割である。また、乳児院の将来的な課題の一つとして、アセスメントの充実が掲げられている（厚生労働省，2014）。

多様な事情で入所してくる子どもに対して、多職種による総合的なアセスメントが求められている。その中で心理職は、心理の視点から子どもの発達のアセスメントが必要とされる。すなわち、全般的な発達とアタッチメントの発達状況双方のアセスメントが、乳児期の子どもの発達を保障していくうえで重要となる（厚生労働省，2012）。

アタッチメントは生後1年間に形成され、その後段階を経て発達していく（Bowlby, 1969）。この子どものアタッチメントの発達には、養育者の

かわりが欠かせない。乳児院の心理職は、定期的に子どもの発達状況をとらえ、生活場面で養育者と積極的に交流していく(全国乳児福祉協議会, 2014)。身体や認知や言語の発達のみならず、子どものアタッチメント行動にも、当然着目すべきである。これを具体的に行うには、養育者と子どもの相互交流を取り上げる必要がある。アセスメントする視点を持つとともに、子どものアタッチメント行動に対し養育者が適切に応答していけるようにしていくことが望ましいと思われる。しかしながら、特に、最早期のアタッチメント行動について、心理職がどのようにとらえているかには、一定の見解が共有されているとは言えない状況であろう(青木, 2017)。

筆者は、乳児院の養育において、子どものアタッチメントの発達支援を行う実践研究のプロジェクトに参加している¹⁾。そこでは、乳児院の生活場面に継続的に関わりながら、現場で心理職が求められるニーズを検討してきた。その一つが、こうした、アタッチメントの重要さはわかるが、それをどうやって促進できるのかの具体的な助言がほしい、というものである。これは、最もなことだと思われる。そこで本論では、乳児院のような子どもの生活の場で、アタッチメントも考慮した子どもの発達状況をアセスメントできる視点を得ることを試みる。そのために、発達検査にみられる子どものアタッチメント行動を整理した。

II. 生後1年間のアタッチメント行動

生後1年間のアタッチメント形成期におけるアタッチメント行動の発達は、Bowlbyの観察研究から始まり今日に至るまで多くの知見が蓄積されてきた(たとえばBowlby et al., 1952; Bowlby, 1969; Ainsworth & Bell, 1972)。まず、アタッチメント行動は定位、発信、接近行動の3種類の行動からなり、アタッチメント対象が特定できない頃から4段階を経て発達していくことは周知のとおりである(Bowlby, 1969)。

生後1年のアタッチメントが形成された後は、アタッチメント対象との分離・再会場面を中心としたアタッチメント行動からアタッチメントスタイルを評価していく。この評価法に、国内外ではストレンジシチュエーション(Ainsworth et al., 1978; 以下SSP)が長らく妥当性のある方法として用いられてきた。また、SSPのように実験場面を設けずに日常場面の行動観察から測定する方法として、アタッチメントQソート法(Waters & Deane, 1985; 近藤, 1993)もある。

しかしながらアタッチメント形成期のアタッチメント行動の発達は、観察研究の記述の蓄積があるものの、そうした行動を評価する目的であり活用されていないようである。しかし1ヵ月未満から入所する乳児のアタッチメント形成支援においては、好ましくこの段階のアタッチメント行動の発達状況を確認していくことは重要だと思われる。この臨床的ニーズに応えるようにして、青木・近藤(2017)は、子どもの日々の生活の中で、臨床家がアタッチメント行動の発達を確認できるよう、これまでの知見(Spitz, 1965; Ainsworth, 1967; Bowlby, 1969; Wolff, 1969; Kisilevsky et al., 2003; Marvin et al., 2016)を整理し、0から3ヵ月までのアタッチメント行動指標を作成している。表1はそれに倣い、アタッチメント第二段階、第三段階の指標も合わせて整理したものである。

III. 生活臨床の中での発達アセスメント

ところで、子どもの回復やケアのために生活場面を中心においた様々な手立てを「生活臨床」という(増沢, 2012)。乳児院における臨床活動も、子どもの生活場面で行われる点においてこの生活臨床に含まれると考えられる。このような構造では、隔離された場で個別にじっくり時間をかけて臨床活動を行うことが難しい、あるいは必ずしも望ましいとは言えない場合がある。そのような場合、子どもの生活に参加し多職種と起こす日々の

表1 アタッチメント行動指標例

時期 (月齢)	アタッチメント行動の項目	アタッチメント行動の種類			
		定位	発信	接近	
第一段階	0	1.他のものと比べて人の顔を見ることへの嗜好性を示す	○		
		2.正面から顔を見せ、凝視し、話しかけると乳児がそれを見ていることで視的刺激となる	○		
		3.穏やかな聴覚刺激に対して静かになり注意を向ける傾向にあり、人の声に特に応答的	○		
		4.人の声を好んで認識する	○		
	1	5.顔を見せ、話しかけるとそれを追視する	○		
		6.手のひらへの刺激に対するグラスピングがみられる	○		
	2	7.目を他に移さずに母親の顔を凝視しながら授乳される	○		
		8.他者よりも母親に多く声掛けする		○	
	3	9.他者ではなく母親に抱かれるとすぐに泣き止む	○		
		10.母親に聞かされた音を反復する		○	
		11.母親をみると笑い、声を発する		○	
第二段階	4	12.母親の動きを目で追う	○		
		13.母親との分離で落ち込んでも、再会時には喜んで(微笑む、キャッキヤと叫ぶ、興奮する)出迎える		○	
		14.母親が離れると泣く、後を追う、またはその両方をする(～7ヶ月まで)		○	
	5	15.膝の上や隣にいる時も、自発的に養育者とコンタクトを取ろうとする(～9ヶ月まで)		○	
		16.養育者によじ登る(～9ヶ月まで)			○
	6	17.後追いする			○
第三段階	7	18.再会すると手をたたいて喜ぶ(～12ヶ月)		○	
		19.母親を安全基地として探索する ※ずりばいができるようになると、いつも母親の近くにいるのではなく、少し離れて探索する(7ヶ月半～10ヶ月半)			○
		20.母親に顔をうずめる(～15ヶ月)			○
	10	21.しがみつく ※強いしがみつきは、知らない人や知らない場所への反応として現れる(～14ヶ月)		○	○

※は項目に関連する具体的な行動を示している

出来事の中に乳児のケアや回復の機能があるという(増沢, 2012)。したがって、成長していく子どもの発達状況を確認するための発達検査は、生活に参与しながら行える、行動観察に基づくアセスメントが望ましいと思われる。

乳児院での実施報告がある発達検査として、新K式発達検査 2001(京都国際社会福祉センター, 2001; 以下K式)、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査(遠城寺, 2009; 以下遠城寺式)、KIDS(三宅, 1989)などが挙げられる(白百合ベビーホーム, 2015)。また、乳児院乳児を対象とした研究の中では、津守式乳幼児発達検査(津守・稲毛,

1995; 以下津守式)も使用されていた(網野他, 1981)。また、KIDSの実施方法は養育者記述式であり、津守式は養育者からの聴取によっても実施する。そのためこれらの発達検査は、乳児院での養育者との対話の中でアセスメントすることも可能である。よって、すでに乳児院で利用されていることが確認できたK式、遠城寺式、KIDSに津守式を加えた4種は、乳児院で比較的良好に用いられている、あるいは用いやすい発達検査だと思われる。

IV. アタッチメント行動指標と発達検査

K式、遠城寺式、KIDS、津守式の各発達検査で調べている発達領域は、少しずつ異なる。それらを列挙してみると、身体的発達、認知発達、社会性の発達、生活習慣の発達、言語発達といった領域が挙げられる。こうした発達領域を調べる項目の中にアタッチメント行動指標と重なり合う項目があれば、その項目は特定の発達領域の発達を調べるだけでなく、アタッチメントの発達もみることができる。そこで、選んだ4種の発達検査の

中から、アタッチメント行動指標（青木・近藤、2017）と類似する項目を調べた（表2）。

1. 発達検査からの抽出項目

1) 抽出項目の発達領域

まず、発達検査から抽出した項目の発達領域に着目してみる。K式では、「言語・社会」の発達領域の項目が該当した。遠城寺式は、「社会性：対人関係」または「言語：言語理解」の2領域が該当した。KIDSでは、「対成人社会性」や「言語理解」、「表出言語」の発達領域の項目が該当

表2 各発達検査の中のアタッチメント行動の指標

時期 (月齢)	発達検査の項目	発達検査の領域		アタッチメント行動			
		社会性	言語	定位	発信	接近	
第一段階	0	泣いているときに抱き上げるとしづまる (遠城寺式/社会性：対人関係)	○		○		
		顔を注視 (K式/言語・社会)	○	○	○		
	1	人の追視 (K式/言語・社会)	○	○	○		
		声の方を向く (K式/言語・社会)	○	○	○		
		人の顔をじっと見つめる (KIDS/対成人社会性)	○		○		
	2	物、顔などを、じっとみつめる (津守式/社会)	○		○		
		人の顔をじいっとみつめる (遠城寺式/社会性：対人関係)	○		○		
		人の声に注意する(動きが一時止まる) (KIDS/言語理解)		○	○		
		あやすと泣きやむが、人がはなれると泣く (津守式/社会)	○			○	
	3	人の声でしづまる (遠城寺式/言語：言語理解)		○	○		
		人の声がする方に向く (遠城寺式/社会性：対人関係)	○		○		
		人の声のする方に首を回す(目が動く) (KIDS/言語理解)		○	○		
そばを歩く人を目で追う (津守式/社会)		○		○			
第二段階	4	母親の顔をみると安心する (KIDS/対成人社会性)	○			○	
	5	母親の声を聞き分ける (泣き声が静まるなど) (KIDS/言語理解)		○	○		
	6	母親と他の人の声を聞き分ける (遠城寺式/言語：言語理解)		○	○		
		母親が手をさしのべると、喜んで自分から体をのりだす (津守式/社会性)	○				○
		母親と他の人との区別がつく(泣いているときも母親が抱かないと泣きやまない) (津守式/社会)	○		○		
	母親の姿が見えなくなるとのぞき込んで探す (津守式/社会)	○				○	
7	親の声が聞こえるとそれにつられて声を出す (KIDS/表出言語)		○		○		
第三段階	9	要求がある時、声を出して親の注意を引く (KIDS/表出言語)		○		○	
	10	親がいなくなろうとすると親の後追いを (KIDS/対成人社会性)	○			○	
	10	母親にまわりつく (KIDS/対成人社会性)	○			○	
	12	父や母の後追いを (遠城寺式/社会性：対人関係)	○			○	
	12	親の声が聞こえるとそれにつられて声を出す (KIDS/表出言語)		○		○	

した。そして津守式では、「社会」の領域が該当した。発達検査ごとに少しずつ定義は異なるものの、抽出できた項目はどの検査においても「社会性」や「言語」の発達領域の項目だった。

2つの発達領域の抽出項目数を比べると「社会性」の発達領域の項目の方が多かった。そのためどの発達検査でも主に「社会性」の発達領域の項目に着目することでアタッチメントの発達も確認できる。「言語」の発達領域に関しては、5ヵ月までは言語発達の中でも言語理解の項目であり、KIDSと遠城寺式でみられた。そして6ヵ月以降は表出言語に変わっており、KIDSの項目のみが抽出された。

2) 指標の月齢と合致した項目

次に、アタッチメント行動指標で達成が期待される月齢と発達検査項目で設定される月齢と比較し、それらが合致した項目を整理した。

アタッチメント行動指標0ヵ月時の「1. 他のものと比べて人の顔を見ることへの嗜好性を示す。」は、K式0ヵ月時の「顔を注視」にみられた。また、アタッチメント行動指標1ヵ月時の「5. 顔を見せ、話しかけるとそれを追視する」も、同じくK式で「人の追視」の項目が指標同様1ヵ月時の項目としてあった。このように、生後1ヵ月までの最早期は、K式の項目と月齢が合致することが多かった。

アタッチメント第二段階以降になると、発達による個人差が顕著に現れてくることを考慮し、アタッチメント行動指標の達成時期に幅が出てくるようになる。4ヵ月時の「母親が離れると泣く、後を追う、またはその両方をする」も、7ヵ月までと達成時期に猶予がある。この間に収まる6ヵ月時の項目として、津守式の「母親の姿が見えなくなるとのぞき込んで探す」があった。また、アタッチメント行動指標の「20. 母親に顔をうずめる」に対応するKIDSの「母親にまわりつく」は10ヵ月時の項目であり、指標の7～15ヵ月時という月齢に該当していた。

以上合計4つの抽出項目が、アタッチメント行動指標の月齢と合致していた。これらの項目はそのままアタッチメントの発達のアセスメントに適用し得ると思われる。

3) 指標の月齢より早い項目

続いて、アタッチメント行動指標よりも、対応する発達検査の方が早く月齢が設定されている項目を整理した。

アタッチメント行動指標3ヵ月時の「9. 他者ではなく母親に抱かれるとすぐに泣き止む」は、遠城寺式では0ヵ月時の項目として、対象は母親ではないものの、「泣いているときに抱き上げるとしずまる」があった。アタッチメント行動指標4ヵ月時の「12. 母親の動きを目で追う」には津守式3ヵ月時の「そばを歩く人を目で追う」が該当していた。同じく4ヵ月時のアタッチメント行動指標として「13. 母親との分離で落ち込んでも、再会時には喜んで(微笑む、キャッキヤと叫ぶ、興奮する)出迎える」がある。これには、KIDS3ヵ月時の「母親の顔をみると安心する」が対応すると考えられた。4ヵ月時の最後の指標である「14. 母親が離れると泣く、後を追う、またはその両方をする」は、津守式2ヵ月時の「あやすと泣きやむが、人がはなれると泣く」にみられた。

以上のように、発達検査の方がアタッチメント指標よりも項目の月齢が早く設定されているのは、アタッチメント行動指標4ヵ月時の、母親を希求する行動や母親に対する乳児の情緒的反応であった。これらの指標に対応していた発達検査項目では、人に対する乳児の行動としては類似している。しかし発達検査の項目では、人全般に対する反応とされている。そのため、アタッチメント対象を乳児が区別出来ているか、という点は考慮されていない。したがってこれらの項目を用いてアタッチメントの発達を確認するためには、人に対する乳児の行動が、徐々に主たる養育者のみに特化して現れる点に着目する視点が求められるであろう。

4) 指標の月齢の方が遅い項目

抽出した項目の達成月齢をアタッチメント行動指標と比較すると、多くは発達検査項目の月齢の方が遅く設定されていた。

アタッチメント行動指標0ヶ月時の「2. 正面から顔を見せ、凝視し、話しかけると、乳児がそれをみることで視的刺激となる。」は、KIDS1ヶ月時の「人の顔をじっとみつめる」、津守式1ヶ月時の「物、顔などをじっと見つめる。」、遠城寺式2ヶ月時の「人の顔をじいっとみつめる。」が該当していた。人の顔に対する0ヶ月時のアタッチメント行動では、発達検査項目の方が最長で2ヶ月遅れていた。

同じくアタッチメント行動指標0ヶ月時の「3. 穏やかな聴覚刺激に対して静かになり注意を向ける傾向にあり、人の声に特に応答的。」や「4. 人の声を好んで認識する。」といった人の声に対するアタッチメント行動は、K式1ヶ月時の「声のほうを向く」、KIDS2ヶ月時の「人の声に注意する。(動きが一時止まる)」、KIDS3ヶ月時の「人の声のする方に首を回す。(目が動く)」、遠城寺式3ヶ月時の「人の声がする方に向く」、「人の声でしずまる」といった項目が該当した。これらの項目は最長で3ヶ月アタッチメント行動指標から遅れていた。さらに、これらの項目にみられる乳児の行動がよりアタッチメント対象に特化していくものを含めると、KIDS4ヶ月時の「母親の声を聞き分ける。(泣き声が静まるなど)」、遠城寺式4ヶ月時の「母親とほかの人の声を聞き分ける」、「呼びかけに反応」と、さらに1ヶ月遅い4ヶ月時の達成項目になっていた。声という聴覚刺激に対しては、アタッチメント第一段階の期間内では発達検査項目の方が最長3ヶ月の遅れがある。そしてその行動をもってアタッチメント対象を特定する面も含めると、アタッチメント第二段階最初の月齢に達成が見込まれていた。

アタッチメント行動指標3ヶ月時の指標である「9. 他者ではなく母親に抱きあげられるとすぐに泣き止む」は、津守式では6ヶ月時の「母親と

他の人との区別がつく(泣いているときも母親が抱かないと泣きやまない)」が該当し、達成月齢がアタッチメント指標よりも遅かった。同じく3ヶ月時の指標「10. 母親に聞かされた音を反復する」は、KIDS6ヶ月時の「親の声が聞こえるとそれにつられて声を出す」が該当し、こちらも発達検査の方が3ヶ月遅れていた。また「11. 母親をみると笑い、声を発する」はKIDS7ヶ月時の「要求がある時、声を出して親の注意を引く」や12ヶ月時の「親の声が聞こえるとそれにつられて声を出す」が該当し、乳児からの発信行動には大幅な遅れがあった。続いて4ヶ月の「13. 母親との分離で落ち込んでも、再会時には喜んで(微笑む、キャッキヤと叫ぶ、興奮する)出迎える」は、津守式では「母親が手をさしのべると、喜んで自分から体をのりだす」という6ヶ月の項目が該当していた。

最後に、アタッチメント行動指標6ヶ月時の「17. 後追いする」はKIDS9ヶ月時の「親がいなくなろうとすると親の後追いをする」、遠城寺式12ヶ月時の「父や母の後追いをする」が該当した。移動運動を伴う行動になってくると、発達検査の方が特に遅れが目立っていた。

2. アタッチメントの発達段階の観点から

ここまで、抽出した発達検査項目に関して、該当項目の発達領域や、アタッチメント行動指標との達成月齢の比較について述べてきた。ここからは、アタッチメントの発達段階ごとに抽出項目の特徴を整理した。

1) 第一段階(生後3ヶ月まで)

この時期は、津守式で受動的な身体統制の時期と言われるように、置かれた位置で体を適応させる。K式にでも主に仰臥位での乳児の反応を確認しており、運動機能が極めて限定されている時期である。そのためアタッチメント行動指標においても、定位行動が中心となっている。定位行動といえば、刺激を感覚器を使って最大限に取り入れようとする

る行動であるが、その刺激は大きく分けると2種類あった。

一つは「人の顔を見ることへの嗜好性を示す」、「正面から顔を見せ、凝視し、話しかけると乳児がそれを見ていることで視的刺激となる。」にみられる人の顔という視覚刺激である。もう一つは、「穏やかな聴覚刺激に対して静かになり注意を向ける傾向にあり、人の声に特に応答的」、「人の声を好んで認識する」にみられる人の声という聴覚刺激である。これらの刺激に対するアタッチメント行動は、発達検査項目で、人の顔という視覚刺激に対する乳児の行動は最長で2ヵ月、人の声という聴覚刺激に対する乳児の行動は、最長で3ヵ月アタッチメント行動指標よりも遅れる傾向にあった。

この時期、人の顔という視覚刺激に対する行動の多くは「社会性」の発達領域である。したがって、アタッチメント対象が特定されていないこの時期は、人の顔を見る「社会性」をアセスメントするための項目に着目することでアタッチメントのアセスメントにつながると言えるであろう。一方、人の声に対する乳児の行動に関する項目は、「言語」の発達領域にあたる。人の声という聴覚刺激に対しては「言語」の発達領域の項目に着目していくと良いと思われる。

2) 第二段階（生後4ヵ月から6ヵ月まで）

第二段階になると、徐々に他者とアタッチメント対象が分化してくる。第二段階初期の4ヵ月時になると、アタッチメントの指標として「母親との分離で落ち込んでも、再会時には喜んで（微笑む、キャッキヤと叫ぶ、興奮する）出迎える。」や「母親が離れると泣く、後を追う、またはその両方をする。」といった母親との分離後の発信、接近行動がみられた。第一段階と比べて活発に動けるようになりアタッチメント対象を求める行動もより顕著になる。

この時期はアタッチメント指標よりも発達検査項目の月齢の設定の方が早い、あるいは合致して

いることが多い。月齢が合致している項目では、乳児の行動の対象が「母親」になっており、第一段階でみられた項目で乳児の行動対象であった「人」から変化してきている。これは、アタッチメント対象が特定されてくるこの時期のアタッチメント発達に即している。これらの項目はそのままアタッチメントのアセスメントに用い得る項目と言えるであろう。一方月齢が早い項目では、乳児の行動の対象が「人」であった。したがって、こうした項目でアタッチメントの発達を確かめるには、行動がアタッチメント対象に対してであるかを見極める必要があるだろう。

一方発達検査の方が月齢が遅い項目として、アタッチメント行動指標6ヵ月時の「後追い」がある。このように移動運動を必要とするようになってくると、発達検査項目は、KIDSの9ヵ月時、遠城寺式の12ヵ月時と、月齢としてはアタッチメントの第三段階に入ってからみられた。KIDSでは9ヵ月時の運動発達として「お尻を上げたハイハイができる」、遠城寺式では12～14ヶ月で「2, 3歩あるく」という移動運動の発達項目がある。そのため接近行動の場合は、これらの運動発達が十分になされるのを待つ必要があるために、発達検査項目では遅く設定されていたと考えられる。

3) 第三段階（生後7ヵ月～2, 3歳まで）

アタッチメントが形成される第三段階に差し掛かると、乳児の運動機能も備わってくるために、接近行動のように自らアタッチメント対象を求めに行くようになる。アタッチメント行動指標では「母親に顔をうずめる。」、「しがみつく。」といった接近行動が中心となる。この時期は発達検査における運動発達上こうした接近行動ができるようになってくる。それに伴い、KIDS10ヵ月時の「まわりつく」やKIDS9ヵ月時の「親がいなくなろうとすると親の後追いをする」、遠城寺式12ヵ月時の「父や母の後追いをする」などが一斉に現れてくる。

また、KIDS7ヵ月時の「要求がある時、声を出

して親の注意を引く」や12ヵ月時の「親の声が聞こえるとそれにつられて声を出す」のように、アタッチメント行動指標上第一段階に達成される発信行動は、発達検査では遅く設定されていた。発達検査においてこれらの発信行動に該当する項目は「言語」の発達領域の項目である。この月齢の違いは、言語発達上はアタッチメントの第三段階に現れる発信行動も、アタッチメント対象という関係性にあるとより早期に現れる可能性を示唆していると考えられる。言語発達としては第三段階に達成される発信行動も、より早期に確認できれば、対象との関係性が育っていることを示唆している可能性がある。

V. まとめ

以上、本論では、アタッチメント行動指標と発達検査項目の共通部分を整理した。0～3ヵ月の「社会性」、「言語」の発達領域の項目を中心に、どの発達検査においてもアタッチメント行動にあたる項目が抽出された。

ただし、両者は達成月齢には、差が見られた。これは、多くが達成する時期を通過した時点で、チェック項目とする発達検査の目的からすると、その時期が遅れることは、かなうものであった。

従って、もし、当該の項目が発達検査で想定される時期に通過していなかった場合、「社会性」や「言語」能力の発達と共に、養育者との関係性などもアタッチメントの観点から検討することが望ましいと言えるだろう。

もとより、本論は、実証性のある理論と手続きによって作成された発達検査を、別の目的で使用すべきだと主張するものではない。しかしながら、家庭的養育を実現しようとする、乳児の生活場面で、できる限り子どもの生活に侵襲的にならずに近づき、効率よく子どもの発達の重要な側面をアセスメントしていくために、様々な工夫が必要となる。

また、キャリアの短い心理職にとって、生活臨

床で、広い範囲に注意を向け、しっかりとしたアセスメントを行うことは非常に難しい課題と言わざるを得ない。少なくとも、一つの発達のチェックリストから、その時気づくべき様々な重要な情報が得られることを心理職が知ることは、日々の臨床活動に大いに役立つものと思われる。

今後は、実際の観察に基づいた、アタッチメント発達に関する基礎的データを蓄積し、乳児院の子どもたちの適切な発達援助について検討しておく予定である。

<注1> 本稿の一部は、JSPS 科研費 15K13137 (代表: 青木紀久代) の助成を受けた。

文献

- Ainsworth, M. D. S. (1967). *Infancy in Uganda: Infant care and the growth of love*. The Johns Hopkins Press, Baltimore.
- Ainsworth, M. D., Bell, S. M., & Stayton, D. J. (1972). Individual differences in the development of some attachment behaviors. *Merrill-Palmer Quarterly*, 18, 123-143.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Ainsworth, M. D. S. (1985). Attachments across the life span. *Bulletin of the New York Academy of medicine*, 61(9), 792.
- 網野 武博・萩原 英敏・金子 保 (1981) . 小児の精神身体発育からみた初期環境における Separation Deprivation の影響に関する研究
- 青木 紀久代 (2017) . 乳児院での関係性支援を考える 小規模グループケアの質と最早期のアタッチメント 乳児保育, 185, 15-19.
- 青木 紀久代・近藤 清美 (2017) . 日本心理学会第36回大会論文集, 97.
- Bowlby, J., Robertson, J., & Rosenbluth, D. (1952). A two-year-old goes to hospital. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 7(1), 82-94.
- Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Vol.1, Attachment. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J. 黒田 実郎・大羽 葵・岡田 洋子・黒田 聖一 (訳) (1976) . 母子関係の理論 岩崎学術出版社)

- 遠城寺 宗徳 (2009) . 遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法：九州大学小児科改訂新装版. 慶応義塾大学出版社.
- 近藤 清美 (1993) . 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向と Q 分類法によるアタッチメントの測定, 発達心理学研究, 4(2), 108-116.
- 厚生労働省 (2012) . 乳児院運営指針.
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/svakaitekiyougo/dl/yougo_geniou_05.pdf (2017年3月15日)
- 厚生労働省 (2014) . 乳児院運営ハンドブック.
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikvoku/0000080103.pdf> (2017年11月8日)
- 厚生労働省 (2017) . 社会的養護の現状について.
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikvoku/0000172986.pdf> (2017年10月22日)
- Kisilevsky et al. (2003). Effect of experience on fetal voice recognition, *Psychological, science* 14, 220-224.
- 京都国際社会福祉センター (2001) . 新版 K 式発達検査 2001.
- Marvin et al.(2016). *Nomative Development: The Ontogeny of Attachment in Childhood*, Cassidy, J. & Shaver, P. R. (Ed). *Handbook of attachment : theory, research, and clinical applications Vol.3*, The Guilford Press; New York, 273-290.
- 増沢 高 (2012) . はじめに——生活臨床と心理臨床をつなぐ——, 社会的養護における生活臨床と心理臨床 多職種協働による支援と心理職の役割 (pp.7-12) 福村出版.
- 増沢 高・青木 紀久代 (2012) . 社会的養護における生活臨床と心理臨床 多職種協働による支援と心理職の役割 福村出版.
- 三宅和夫 (1989) . KIDS 乳幼児発達スケール—KINDER INFANT DEVELOPMENT SCALE—. 大村政男・高島正司・山内茂・橋本泰子 (編) . (公財) 発達科学研究教育センター.
- 白百合ベビーホーム (2015) . 27 年度白百合ベビーホーム事業報告, <http://nikoniko-park.com/news/upload/8-0 link file.pdf> (2017年11月27日)
- Spitz(1965). *The first year of life: a psychoanalytic study of normal and deviant development of object relations*. International universities press, New York.
(母子関係の成り立ち：生後1年間における乳児の直接観察, (訳) 古賀行義, 東京：同文書院)
- 津守 真・稲毛 教子(1995). 増補 乳幼児精神発達診断法—0才～3才まで— 大日本図書
- Wolff, P. H.(1969).*The natural history of crying and other vocalizations in eraly infancy*, Foss, B. M. (Ed). *Determinants of infant behaviour*(Vol. 4, pp.81-109). New York: Barnes & Noble.
- 全国乳児福祉協議会 (2014) . 乳児院における心理職のガイドライン.
- 全国乳児福祉協会 (2014) . 乳児院 心理職 赤ちゃんの暮らしと育ちを応援して. http://www.nyujiin.gr.jp/shiryo/shinrishoku_pamph.pdf (2017年11月8日)